

《原 著》

Percutaneous coronary intervention (PCI) の適応判定における 運動負荷心筋シンチグラフィの有用性について

圧センサー付きワイヤーによる myocardial fractional flow reserve (FFRmyo) との比較

藤繩 学* 阿部 正宏** 大久保信司* 山科 章***

要旨 [目的] $^{201}\text{TlCl}$ 負荷心筋シンチグラフィ (St-MPI) による percutaneous coronary intervention (PCI) 適応判定の有用性を検討すること。[背景]近年、PCI の適応判定に圧センサー付きワイヤーを用いた myocardial fractional flow reserve (FFRmyo) の有用性が報告されている。しかし本法の結果と St-MPI の結果との不一致をしばしば経験する。[対象と方法]対象は AHA 分類 75~90% の冠動脈狭窄を有する 1 枝病変の慢性虚血性心疾患 42 例。冠動脈造影 (CAG) 時に FFRmyo を測定し、全例 0.75 未満であることを確認した。CAG 直前に施行された St-MPI の結果より負荷陽性群 (P 群) 18 例と陰性群 (N 群) 24 例に分け、P 群のみに PCI を選択した。両群を 4.4 ± 0.6 年追跡し、心事故の有無を調査した。心事故のない症例群では 1 年後に St-MPI を再検した。[結果] P 群において致死的心筋梗塞が 1 例発生したが、N 群では重大心事故 (心臓死や非致死的心筋梗塞) の発生はなかった。軽度心事故 (新たな PCI と target lesion re-vascularization: TLR, 冠動脈バイパス術および心不全) は P 群で 8 例 (44%) に、N 群で 3 例 (13%) に認められ、P 群で有意に高率であった ($p < 0.05$)。P 群のうち非再狭窄例での PCI 1 年後の運動負荷時 VO_2 は PCI 前より改善していたが、その値は N 群では差を認めなかった。[結論] 1 枝病変の安定虚血性心疾患の生命予後は良好であることから、主たる心事故は軽度心事故となる。軽度心事故を end point とした場合、St-MPI による PCI の適応判定は FFRmyo より有用である。

(核医学 44: 97–104, 2007)